

## 「 AI とのくらし 」

( 17 時間 )

授業者：佐藤 秋杜

### 1 本校の国語科で目指す「価値」



### 2 本単元の社会的背景（現状と課題）

中央教育審議会答申（2016）では、これからの子供たちに育む資質・能力として、「言葉を通じて伝え合う力」が必要であるとされている。<sup>i</sup>

一方で、経済産業省（2010）は、企業側は学生に対しコミュニケーション力の不足を感じている<sup>ii</sup>ことを指摘している。また、日本システム開発研究所（2009）は「話すこと・聞くこと」の学習指導が低調で生徒のコミュニケーション能力の育成に課題がある<sup>iii</sup>ことを指摘している。このようにコミュニケーション能力の育成に関し、学校教育は社会の要請に応えられているとはいえない状況にある。

佐々木（2004）<sup>iv</sup>は、コミュニケーション能力について「発信者と受信者が文字や音声媒体として情報を伝え合うこと」と定義している。光野・篠原（2018）<sup>v</sup>は、特に音声言語におけるコミュニケーションに着目したうえで、学生に対してのアンケート調査を行っている。その結果、学生のほぼ全員が「話す」「聞く」技術の必要性を認識している一方、言語活動の記憶があるだけで、学んだ言語技術の記憶はほとんどなかったことを明らかにし、小中高12年間の「話すこと」「聞くこと」の指導では十分な言語技術が定着していないと述べている。滝浪（2013）<sup>vi</sup>も戦後の学習指導の変遷を整理する中で、いつの時代にあっても「話すこと・聞くこと」の指導は不十分なまま、学習活動の充実のみ図られてきた感があると指摘している。

これらは、児童が主体的に学習活動に取り組む一方で児童自身が教科の本質にまで学びを深めるまで至っていない、すなわち児童自身が学んだことに対する「よさ」や「満足感」を得られていないという本校が抱える課題とも一致すると考えられる。

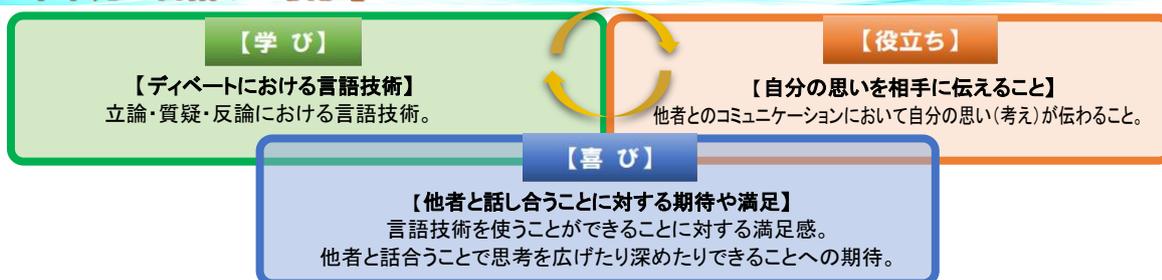
これらの先行研究から「話すこと・聞くこと」領域の指導において、どのような知識や技能を指導し身につけさせていくかについて今まで以上に具体的かつ明確に指導する必要があることが示唆されている。言語技術について鶴田（2001）<sup>vii</sup>は言語活動を適切かつ効果的に営むための技術と定義しており、堀（2003）<sup>viii</sup>は「話すこと・聞くこと」を二十の技術としてまとめ、中学校での実践を報告している。

また、上山（2013）<sup>ix</sup>は学習者が経験した話し合い活動そのものを学習材とすることや学習者が話し合い活動の事後に、話し合いの記録を対象化する活動を設定することが話し合いに関する知識の定着に有効であると述べるなど、大村（2021）<sup>x</sup>は、「話すこと・聞くこと」領域において「メタ認知を重視した話し合い」指導に関する研究が進展を見せていることを指摘している。

本単元では、「話すこと・聞くこと」指導の現状を踏まえつつ、ディベート指導に取り組む。ディベートは第三者を説得することをねらいとした言語ゲームである。また、「立論」「質疑」「反論」と話し合いの手順が決まっている。このディベートについて佐々木（2004）はコミュニケーション能力の育成をより効果的、効率的に達成する上で有効であるとしている。また、山本（1999）<sup>xi</sup>は教育現場でのディベート指導を教育ディベートと呼び、異なる意見に対して異議をとんで新たな意見を提案するようなコミュニケーションを可能にする試みの一つであると述べている。小学校において望ましい学級づくりをディベートによって達成しようとする実践も見られる。<sup>xii</sup>

このことからディベートで話し合われる「立論」「質疑」「反論」において活用する技術（結論から述べる、三点ロジック等）を「ディベートにおける言語技術」とし（FIGUER 1）、本単元ではこれら言語技術を授業で一つ一つ身につけさせていくとともに児童がこれらの言語技術や話し合うことよきさに気づき、日常生活でも適用できる技能やその技能を生かしていこうとする態度を育むことを目指す。

### 3 本単元で目指す「価値」



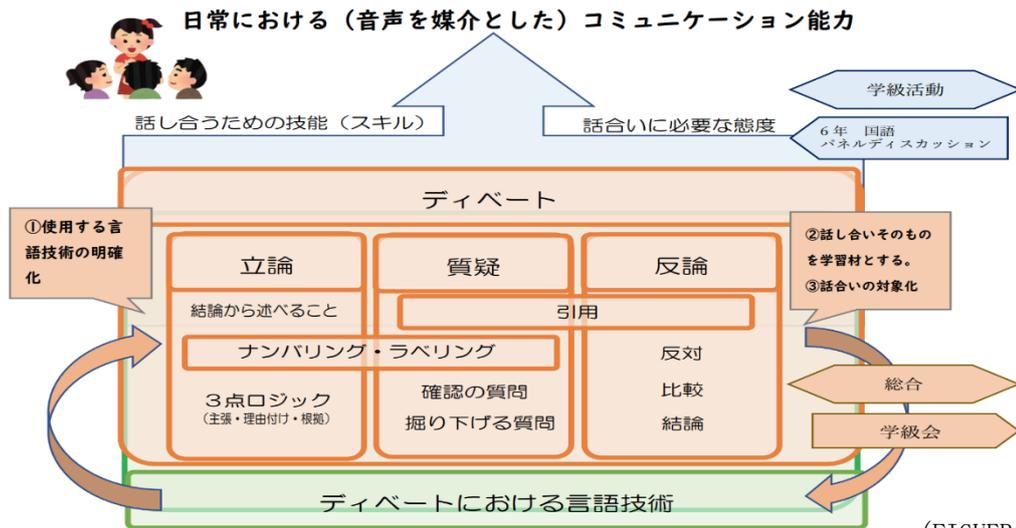
## 4 研究仮説

先行研究をもとに児童の音声を媒体としたコミュニケーション能力を育むため、次のことに留意して単元を構成する。①ディベートを行う上で必要となる言語技術を明確にする。②タブレットを活用しながら、自分たちが経験した話し合い活動そのものを学習材として使用する。③話し合い活動の事後に、その話し合いを対象化し、活用した言語技術について振り返る。

研究  
仮説

①～③を通じて、ディベートにおける言語技術を習得・活用しながら自分の考えを他者に伝えることで、児童は根拠や理由の伴った主張をすることや反論するときにも相手の考えを受け入れた上で自分の考えを述べること等のよさに気づき、日常の音声を媒介としたコミュニケーションの中でも生かしていこうとする思いをもつことができるだろう。

## 5 本単元のデザイン



(FIGUER 1)

## 6 本単元で価値をつくる子供の姿

ディベートにおける言語技術を理解した上で、自分たちの話し合いの様子を学習材として用いたり、振り返ったりすることでディベートにおける言語技術を習得・活用し、理由や根拠の伴った主張をすることや反論するときにも相手の考えを受け入れた上で自分の考えを述べることのよさに気付くことで日常の音声を媒介としたコミュニケーションにも生かしていこうとする。

## 7 本単元の評価規準と評価方法

### 【学び】

※発話・行動観察・授業記録（録画）・ワークシート

#### 【立論における学び】

冒頭で結論を述べるなど話の内容を構成し、自分の立場や意図を明確にするとよいことを理解している。

(思考・判断・表現 A-イ) (思考・判断・表現 A-オ)

資料を活用（引用）し、理由や根拠とすることで相手に自分の考えが伝わることを理解している。

(思考・判断・表現 A-ウ)

#### 【質疑における学び】

相手の主張や理由、根拠について確かめたり、詳しい説明を求めたりすることで自分が聞こうとする意図に応じて相手の考えを引き出すことができることを理解している。(思考・判断・表現 A-エ)

#### 【反論における学び】

反論するときには、相手の話を引用して話すことで、自分の考えや立場を明確にできることを理解している。(思考・判断・表現 A-ウ) (思考・判断・表現 A-オ)

#### 【聞き手における学び】

話し手の目的に応じて話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめている。

(思考・判断・表現 A-エ)

### 【役立ち】

※発話・ワークシート・授業記録（録画）

#### 【言語技術の役立ち（立論）】

他者とのコミュニケーションにおいて話の構成や資料を活用するなどして自分の考えが伝わるよう表現を工夫している。

(思考・判断・表現 A-イ)

(思考・判断・表現 A-ウ)

#### 【言語技術の役立ち（反論）】

互いの立場や意図を明確にしながらか計画的に話し合うために相手の理由や根拠を確かめたり、相手の話を引用して話したりしながら、自分の考えと比較して話し合っている。

(主体的に学習に取り組む態度)

### 【喜び】

※ワークシート・行動観察・質問紙

#### 【言語技術を活用しようとする態度】

資料を活用するなどして自分の考えを表現することのよさに気づき、これからも根拠や理由を挙げて自分の考えを表現しようとする。

(主体的に学習に取り組む態度)

#### 【話し合いに対する期待】

自分の考えを広げたり、深めたりするために、異なる立場の相手とも計画的に話し合おうとしている。

## 8 本単元の構成（全17時）

時	○ 学習活動と価値をつくる子供の姿	★教師のかかわり	評価
※	○自分たちの話し合いの様子についてふりかえり、アンケートに答える。 ○立場が2つに分かれそうな議題を児童から募集する。		
1～2	○アンケート結果をもとに自分たちの話し合い活動における課題をとらえる。 ○話し合いの一形態としてディベートがあることを知る。 ○動画を視聴し、ディベートのイメージをもつ。 ○論題①(給食をやめて弁当にすべきである)を示し、論題を実行する際に生じるメリットとデメリットをマインドマップにまとめる。	★ディベートは第三者を納得させる言語ゲームであることをおさえさせる。	話し合いに対する期待
※	○マインドマップをもとに3～4人のチームを教師側で編成する。		
3 4～5	○説得力のある立論の仕方(ラベリング・ナンバリング・3点ロジック)について知る。 ○立論に必要な根拠や理由についてクローズドブックを使って調べる。 ○使用する資料(表やグラフなど)は共有フォルダ内(ロイロノート)にアップし、事前に相手の資料を確認できるようにする。	★立論の仕方についてパワーポイントを活用し、スライドで示したり、ワークシートを使って文章で示したりしながら児童に例示する。 ★引用の仕方について指導する。	話の構成 立論
6	○審判を行う際の「評価のポイント」(FIGUER2)を話し合い、全員で確認する。 ○エキシビジョンマッチを1試合行い、ディベートの流れを全体で確認する。その際、メモの取り方や質問の仕方について確認する。 (ゲームの流れ)	★はじめは教師が司会を行う。 ★ICTを活用し、話し合い中も常に教師のメモを拡大し、児童に例示する。 ★それぞれの立場をカードで示し、視覚的にもとらえやすくする。 ★児童の数名にiPadを渡し、話し合いの様子を撮影する。	賛同
7～9	○「評価のポイント」に基づいてどちらがより納得する意見であったかを判定する。 ○前回のディベートの様子をビデオで確認し、言語技術が活用されている場面を振り返った上でその時間ごとの課題を設定し、次のチームがディベートを行う。	★動画を編集し、立論時の様子を焦点化したり、意識させたい言語技術について動画の中にコメントを入れたりして児童に言語技術を意識して話し合うよう促す。	言語技術の習得 言語技術を活用しようとする態度
10	○論題②(小学生の携帯電話の使用を禁止すべきである)を示し、論題の意味を全体で確認する。そのうえでこのプランを実行した際に生じるメリットとデメリットについてマインドマップにまとめる。	★それぞれの立場が携帯電話の使用について賛成か反対かがすぐに分かるようイラストを掲示する。	話し合いに対する期待
※	○マインドマップをもとに4～5人のチームを教師側で編成する。		
11 12～13	○相手の主張に対する反論の仕方(①引用②反対③比較④結論)について知る。 ○根拠や理由についてクローズドブックを使って調べる。 ○使用する資料(表やグラフなど)は共有フォルダ内(ロイロノート)にアップし、事前に相手の資料を確認し、反論や予想される反論に対して考えをまとめる。	★相手の話を引用することでかみ合った話し合いを行うことができることを指導する。	反論
14	○審判を行う際のポイントについて振り返り、改めて「評価のポイント」について話し合う(FIGUER3) ○エキシビジョンマッチを1試合行い、ディベートの流れを全体で確認する。	★児童の数名にiPadを渡し、話し合いの様子を撮影させる。 ★それぞれの立場をカードで示し、視覚的にもとらえやすくする。 ★動画を編集し、立論時の様子を焦点化したり、意識させたい言語技術について動画の中にコメントを入れたりして児童に言語技術を意識して話し合うよう促す。	言語技術の習得
15～16 (本時)	○「評価のポイント」(FIGUER3)に基づいてどちらがより納得する意見であったかを判定する。 ○前回のディベートの様子をビデオで確認し、言語技術が活用されている場面を振り返った上でその時間ごとの課題を設定し、次のチームがディベートを行う。		言語技術を活用しようとする態度
17	○事前アンケートをもとに学習活動全体をふりかえり、日常の音声を経済としたコミュニケーションに生かせるようにする。	★ふりかえりシートに記入するよう促す。	話し合いに対する期待

## 9 本時 ( 16 / 17 時 )

### 本時の目標

相手の話を引用して質問したり反論したりすることを通して、お互いに考えを広げたり深めたりすることができることを理解するとともに、反論するときにも相手の立場を尊重しようとする態度を養い、これからの話し合い活動に生かしていこうとすることができる。

### 【前時まで】

本時に話し合うグループ以外は前時まで自分たちの試合（ディベート）を終えている。つまり、すべてのチームが立論や質疑、反論を経験してきている。本時では、残りのチームが話し合いを行いその後学級で活動の振り返りを行う。  
ディベート後は、事前アンケートの結果や今までの自分たちの話し合いの様子をまとめたビデオを視聴した上で「今回学んだこと・今後の話し合いにも生かせるコツ・意気込み」という視点で振り返りを行い、友達との交流を通して日常の音声やメディアとしてのコミュニケーションにも生かしていこうという意欲をもたせることをねらいとする。

### ○ 学習活動や子供の姿

○ 前時に行ったチームのディベートの様子を動画で確認し、本時でも活用する言語技術について振り返る。

反論するときにも相手の主張を引用した上で反対するとよかったですよ。

反論の時にも、相手の主張と比べてもう一度自分たちの主張をすると説得力が増したね。

○ 教師の主張（中休みをなくすべき）を聞き、反論の練習を行う。

○ 「小学生の携帯電話の使用は禁止すべき」という論題について肯定派と否定派に分かれてディベートを行う。

○ 肯定側	① 立論 (1分)	作戦タイム	④ 質疑応答 (1分)	作戦タイム	⑤ 反論 (2分)	⑦ 判定
	③ 立論 (1分)		④ 質疑応答 (1分)		⑤ 反論 (2分)	
● 否定側						

- フロアは「評価のポイント」(FIGUER 3)に基づいてどちらに納得したかについてワークシートに記入する。
- ディベートを行ったチームは、上手いところなどを振り返り、ワークシートに記入する。
- 事前アンケートをもとに自分たちの話し合いにおける課題を確認する。
- 単元全体をふりかえり、自分たちの課題がどれだけ達成されたかについてふりかえる。

### 今回学んだこと・今後の話し合いにも生かせるコツ・意気込み

○ 友達のふりかえりを学級全体で共有する。

説得力のある主張をするためには根拠や理由があるとよかったです。

質問するときにも引用を使うことができたよ。

相手の主張にきちんと反論するためにも相手の話を引用することを意識したい。

### 言語技術を使うことのよさに気付いている【記述】

これからは自分から積極的に質問や反論をしていきたいな。

学んだことを今後の話し合いにも生かしていきたいな。

3点ロジックを意識し、みんなを納得させるような意見を言ってみたいな。

やはり今回の話し合いでも反対の立場の意見を聞くことの大切さがわかったよ。

相手の話をよく理解した上で、反論することでお互いが納得する話し合いができそうだ。

### 今後の話し合いに対する期待が表れている。【記述】

### □ 評価 ★ 教師の関わり

★ 動画の中でのよい姿や本時でも意識させたいことを動画中にテロップでも表示し、本時のポイントを示す。

★ 「引用」「反対」「比較」「結論」を意識すると説得力のある反論ができたことを確かめる。

★ フロアへの児童には人と意見を分けて、「評価のポイント」に基づいて判断するよう促す。

■ 話し手の目的に応じて話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら考えをまとめている。(ワークシート)

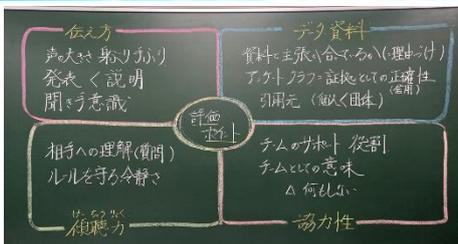
### 言語技術の習得

★ 事前アンケートの内容を振り返りながら、この単元を行う前と後でどのような変化がみられたかを記述するよう促す。

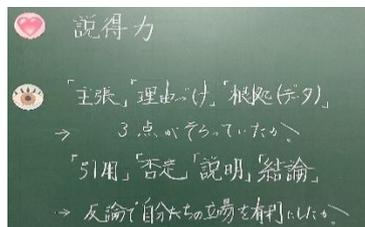
### 言語技術を活用しようとする態度

### 話し合いに対する期待

## 10 補足資料



(FIGUER 2)



(FIGUER 3)

- i 中央教育審議会答申(2016)幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な改善策について。
- ii 経済産業省(2010)大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査。
- iii 財団法人日本システム開発研究所(2009)学習指導と学習評価に対する意識調査報告書。
- iv 佐々木智之(2004)ディベートの視点を活かしたコミュニケーション能力の育成。工学・工業教育研究講演会講演論文集 73-74。
- v 光野公司郎・篠原京子(2018)小中学校国語科における「話すこと・聞くこと」の指導。共栄大学教育学部研究紀要 2, 9-29。
- vi 滝浪常雄(2013)国語科における「話すこと・聞くこと」の指導の課題。安田女子大学紀要, 41, 207-216。
- vii 鶴田清司(2003)言語技術、大槻和夫編、国語科重要用語 300 の基礎知識、明治図書, 18。
- viii 堀裕嗣(2003)発信型授業で「伝え合う力」を育てる、明治図書。
- ix 上村伸幸(2013)話し合う力を育てる学習指導方法の検討。話し合いを対象化する活動を中心に。全国大学国語教育学会国語科教育研究大会発表要旨集, 125, 119-122。
- x 大村幸子(2021)話し合い学習における学習者の学びの姿—学習者のメタ認知的知識に着目した分析を通して—。全国国語教育学会国語科教育, 90, 44-52。
- xi 山本直子(1999)教育ディベートの可能性。全国大学国語教育学会国語科教育研究大会発表要旨集, 96, 6-7。
- xii 菊池省三・菊池道場(2018)学級ディベート、中村堂。